

# 日本地衣学会

# No.30

# ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 目次 雑報.....                          | 103 |
| 分類学関連の新しいメーリングリスト<TAXA> / 岡本達哉..... | 103 |
| 日本蘚苔類学会との学术交流 / 岡本達哉.....           | 103 |
| 「コケ類研究の手引き」 / 岡本達哉.....             | 103 |
| 雲南地衣類調査行2003 / 原田浩.....             | 104 |

## 雑報 Miscellanea

### 分類学関連の新しいメーリングリスト <TAXA>

日本分類学会連合がメーリングリストの開設を予定していることは、以前ニュースレター16号でご報告しました。このメーリングリストがTAXAという名称で、いよいよ2003年12月末から稼動することとなりました。

TAXAには、生物の分類学に関心を持つ方であればどなたでも参加でき、分類学会連合からの広報のほか、会員相互の情報交換、討論などに活用される予定です。

TAXAへの参加を希望される方は、  
<http://cse.niaes.affrc.go.jp/minaka/ml/taxa-top.html>

にアクセスし、記載されている要領に従って管理者の三中信宏さん(農業環境技術研究所)宛てに申し込みを行ってください。

(岡本達哉: 学术交流委員会)

### 日本蘚苔類学会との学术交流

他学会との学术交流の一環として、この度日本蘚苔類学会との間で刊行物の交換を開始しました。蘚苔類学会が発行している学術誌「蘚苔類研究」と地衣学会の「Lichenology」、「日本地衣学会ニュースレター」を毎月交換することとなっています。

地衣類と蘚苔類は共に「こけ」として扱われることもあり、関連の強い分野です。出版物の交換を手始めに今後更に交流を深め、双方の学会発展に役立てていきたいと考えています。

なお、交換した刊行物は秋田県立大学で保管し、毎年夏に開催される大会の際に展示する予定です。

(岡本達哉: 学术交流委員会)

### 「コケ類研究の手引き」

日本蘚苔類学会が創立30周年を迎えたことを記念し、「コケ類研究の手引き (Methods in Bryological Research)」(B5版、124pp.)が同学会から出版され

ました。蘚苔類を研究する上で必要な様々な技法が、多数の専門家によって 12 章にわたり詳細に解説されています。

1 コケ類の採集, 2 標本作製と管理, 3 形態観察法, 4 図版作製法, 5 写真撮影法, 6 染色体観察法, 7 デンブングル電気泳動法実験テクニック(改訂版), 8 分子系統解析法, 9 化学分析法, 10 コケ類の教材化, 11 生態観察法, 12 コケに関係した文献。

このような書籍としては, Methods in Bryology (1988)が服部植物研究所から刊行されていますが, 今

回日本語で出版されたことで, 学生やアマチュアの方々にも利用しやすいものとなっています。また, 本書の内容は地衣類の研究にも応用できる点が多いことから地衣学会の会員にとっても有用な文献です。

本書は日本蘚苔類学会の会員以外でも, 1 冊 3000 円で購入することができます。希望される方は, 日本蘚苔類学会のホームページ (<http://sc1.cc.kochi-u.ac.jp/~bryosoc/welcome.html>)に掲載された購入方法をご参照ください。

**(岡本達哉: 学術交流委員会)**

## 雲南地衣類調査行 2003

ほぼ定刻どおり夜 10 時頃には昆明上空に到着していた飛行機は、激しい雷雨のため上空を旋回し続け、やっと着陸した時には翌 9 月 2 日の 1 時になっていた。幸先の悪いスタートだった。

翌朝、王立松(ワン・リーソン; Wang Li-song)氏の研究室で調査日程等の打ち合わせや、研究所の関係者への挨拶回りを済ませた。その翌日には出発することになった。研究所の自動車(トヨタ ランドクルーザー)に、先の王さんと私、それに運転手を加えた 3 名という構成である。

昆明の街は 9x 年とはずいぶん違い、現代的な建物が並ぶ大都市に変貌していた。真新しい乗用車も多く、渋滞もひどい。しかし郊外には懐かしい風景が広がっていた。一路西へ向かう。

今回の調査は、科研費による「東アジア産淡水生アナイボゴケ科地衣類の分類学的検討」に関する現地調査である。淡水生アナイボゴケ科地衣類としては、東アジアにおいては日本以外で

は中国雲南省からの報告が多く、今回はそれらの産地周辺の調査を行い現地の生育状況を把握するしようというものであった。特に今回は雲南省の西部と北部を対象にした。最初の目的地は怒江(ヌジャン; サルウィン川)の上流域である。9 月 5 日には怒江の雲南省内の最上流部の中心都市である貢山(グンシャン)(図 1)に投宿した。

この周辺からのアナイボゴケ科の報告は、いずれも標高 3000 m などかなり高所からのものだった。谷底(怒江)の標高は、貢山の辺りで約 1500m。西と東には標高 3000 から 4000m 位の山脈が南北に横たわって



図 1. 怒江のほとりに開けた貢山の街。南を望む。



図 2 . 怒江支流の谷を進む . 間もなく大きな石に行く手を阻まれた .

る . 附近には車で高い地点まで行けるルートは 2 箇所しかない . 9 月 6 日 , そのルートの一つに向かった .



図 4 . 怒江支流の谷で見つけたヤイトゴケ属 . 湿っていると , 赤褐色の丸い子器が盛り上がり , 美しい .



図 3 . 山道の急斜面を流れ下る細流 . 淡水生アナイボゴケ科地衣類が石に生える . . .

怒江沿いに少し下り , 左岸の支流沿いの山道を進む . 少しぬかるんでいたが , 予想より道路状況は良い . すぐに川から離れ高度を上げていく ( 図 2 ) . 順調な滑り出し , と思われたのだが , 標高 2000m 過ぎで , 立ち往生となった . 道路の真ん中に直径 3m 以上もある大きな石が行く手を阻んでいたのだ . 標高 3000 m はあきらめ , 附近の調査をすることにした . 斜面のところどころに細流があり ( 図 3 ) , その岩には清水につかりながら , しっかりとアナイボゴケ科が生育していた .

この地方では通常では 8 月末までが雨季だと言うが , 今年も雨季はまだ終わっていない . 本流の濁流の水位は最高位に近い状態を維持しているようだった . 一方 , そのような濁流の本流に比べ , 支流の水は驚くほど澄んでいた . そこで支流の川べりでも地衣類の調査をしばし楽しんだ . 次いで ,



図5. 独龍江への峠の手前. 枝が下がり独特の樹形をした雲南松 *Pinus yunnanensis* は各地で見られた. 様々な針葉樹が生えるというが, 一つ一つ確認する時間は無かった. 陽はだいぶ傾いた.

別の谷に入り, 谷底を歩いた. その土手にヤイトゴケ属が多量に生えていたのが印象的だった(図4).

翌9月7日は, 一番北まで行くことにした. 怒江沿いに北上し香格里拉(シャングリラ; もっと東にある元は中甸と呼ばれた町とは別)とも呼ばれる丙中洛(ピンジュンロウ)を過ぎたが, ここでも立ち往生となった. 怒江に架かる橋が落ちて復旧の見通しが立たないというのだ. 丙中洛での昼食の後, 貢山に引き返し, そこから今度は右岸側の町, 独龍江(ドゥーロンジャン; イラ

ワジ川の上流の雲南領内の川の名前でもある)に向かう山道の峠を目指した. 様々な針葉樹も生えるなど, 維管束植物も面白いらしい.

峠が近くなり標高約3000mになると, 確かによく発達した森林が広がっていた(図5). 流れ落ちる小さな滝に, 思いのほか多くのアナイボゴケ科地衣類を見つめることができた. . . . (続く)

(原田 浩: 千葉県立中央博物館)

**Lichenology 日本地衣学会ニュースレター**  
とも, 投稿先は:

原田 浩: 〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2  
千葉県立中央博物館. Fax 043-266-2481.  
E-mail: h.hrd3@mc.pref.chiba.jp  
(原田浩: 編集委員長)

複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は, 許諾を受けてください. 詳細は本誌13号46ページに.

### Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication,

you or your organization must obtain permission. For details, see no. 13, p. 46 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 30号

発行日: 2004年 1月31日

編集: 原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄  
発行者・発行所: 日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内